

今治さくらいの物語 桜井の町並みと屋号

江戸時代末期から明治にかけて廻船業の行商に従事していた桜井村の親方は、次第に製造業や卸売業に転向していった。とりわけ漆器業は、第一次世界大戦後の好況時代に急速に発展し、製造戸数 60、技術職人は 360 名にまで達した。当時の桜井漆器の発展を知る資料に、大正 11 年の「愛媛縣越智郡桜井町大字桜井濱地圖」がある。裏に記された行商人の一覧をみると、桜井における漆器製造と販売業者は 57 軒存在していたことがわかる。旧桜井町のなかで漆器業者が多くみられたのが旭町や栄町、梅田町、西天神町、蛭子町であり、「小谷屋」や「井野屋」といった屋号で商いを行っていた。漆器業の活況は、当時の町場からも読み取れ、呉服や菓子、醸造業など、様々な業種が立ち並んでいた。酒屋の「油屋」、薬屋の「飴屋」—商売人や行商人たちは、のれんや廻船旗に屋号紋を記し、互いに屋号で呼び合っていた。所々残る古い建物や桜井の町並みから、漆器業の盛況と商業で栄えた当時の面影を見ることができる。

桜井地区地域水産業再生委員会 × 愛媛大学井口梓研究室

